（レジュメ）スターリン主義的組織観の克服

このレジュメは、私が「本部社防」という任務で、一九八九年に戦旗派本部事務所の防衛を担い、そこで定期的に行われていた組織会議にて討論された内容をまとめたものだ。

そしてこのレジュメを基に（『ＰＱＲ地区への手紙』）という文章を書くことになるのだが、これは私が当時所属していた地区組織に対する問題点の指摘であった。当該地区の方々からは「地区の内情を理解していない」とか「指導者の言いなりだ」などと、大変シビアなご批判を頂いた。

この場を借りて反省させてもらえるのならば、当時の私は与えられる情報も少ない中、限られたロジックを通じてしか発想出来なかったということである。皆さんにご迷惑をお掛けしたことについては大変申し訳なく思うが、そういった途上性も含めて見て頂けたらありがたい。

・既に完成された完全な党を前提的に設定し、自分たちは、それに指導されて現場で工作し、人を動員する。
・指導者は既に完成されており、おのずと完全で、不充分なものを認識すると軽蔑したくなる。
・己をも有機的なものとする前衛党が、組織実戦を通じ実践的＝規定的に創造されていくという観点がない。

・つまり自分たちの実践と討論を通じ、有機態としての前衛党が場所的に建設されていくという観点がない。
・相互討論と実践での検証を通じながら不充分・不完全なものが研鑽によって普遍的なものに至っていく過程が組織実践なのだという措定がされていない。
・つまりスターリン主義的組織観にたっている限りでは、指導者は完成されたものとして被指導者の不充分性を検察するという関係にはいる。同様に、被指導者は完成したものとしての指導者に従う関係にはいる。
・その結果、現実的には革命党の創造過程が位置付かなくなり、既に完成されたものとしての活動家のみを望み、絶対であるはずの党にぶら下がる。不充分なものをみては落胆する。
・実践を通じながら、指導・被指導者が相互とも高まっていく党が現実において場所的に創造されていくことが措定されない。
・今までは命令を絶対化してきた、これからは自分の頭で考える。何でもいいから自分の意見を言える事がスタ克だ！というような形式的な問題把握は誤りである。それは全くのサークル主義でしかない。
・革命党は特定の綱領的内容や価値観にもとづき結社として成立し規約にもとづき運営されている。自分の意志を言うことは自由な討論を意味するのではなく、それまでの共同　主観を引き継ぎ、深め、豊富化する方向で問題を論じるということを意味する。
・下級が意見を述べる場合、自分の頭で考えているから偉いのではなく、述べている意見そのものが妥当であるかの内容に問題がある。上級はそこでの討論を保障すべきであり、批判もすれば学びもするという関係にはいる。
・決定は規約にもとづき下されるものであり、従う義務を負う。しかしなぜそういう批判が下されたのかを論証する義務を上級は負う。

対象変革について

・主体的に把握する場合、（対象的に）歴史的反省のうちに論理的構成を実現することにあるわけだが、それは特定の問題意識の追求においてなされる必要がある。

・組織的な反省を行うといった場合、個としての私がなにを思ったのかを自立的に論じるのではなく、組織的な共同主観性との関係で問題をとらえ返していく必要がある。

歴史的事象↓社会的な観念の形成 ↑↓ 組織的対自化↓個人的判断

←・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・→

（ブルジョア的判断）

S・↓

↑・O・V・S・↓・O・　共同主観（ヒュポダイム）

組織 ↑↓ 主体　△、、、、、、、、、△

過去　現在

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

※ S＝主体
O＝客体

・封建的・ブルジョア的・プロレタリア的主体形成の内実について

ＢＦ的主体形成の内実を成すものとしてのプロレタリア的価値観をつかみとるものとして、封建的およびブルジョア的・プロレタリア的主体の概念を突き出し、主体における指針を明確にしていきたい。

・封建的主体―王権制ヒエラルキー、身分的・宗教的・道徳的といったその経済外的規定＝強制を甘んじて受け入れる主体のありかた。

（例）天皇制、排外主義イデオロギー、ナショナリズムｅｔｃ…

・ブルジョア的主体―市民社会的な私人（アトム化された個人）が中心となってブルジョア競争原理における自己実現が至高の課題となる。ちなみにここでのすぐれた主体とは、貨幣の蓄積できる主体である。

封建的主体へのアンチとしてこのブルジョア的主体が是とされる傾向があるといえるが、そういった価値観に陥っている主体にあっては例えばスタ克とは「論争し、批判し、実戦する主体である」といった提起がなされたとしてもそれはブルジョア競争原理としての他者にまさるための論争という位置づけになってしまい、本質的な意味での論争の意義がつかみとられない陥穽におちいる。

・プロレタリア的（階級的）主体―個と全体・自己と組織の統一を目的意識として持つことが核心である。

封建的主体からの飛躍をブルジョア的主体へと収斂していくありかたが求められる訳ではなく、両者を引き継ぎつつ、それを止揚していく連なりにおいて形成される主体こそがプロレタリア的な主体のありかたである。

共同主観の形成とは、上意概念としてのイデオロギーに活動家がしたがっていく連なりを意味するのではなく自らをもその構成主体とする地区および支部共同体が中央からの提起を現在置かれている地平からいかにして物質化していくのかを問題にしなければならない。

FOR THE TEAM

アトミズム批判についての観点

・共同的な主体としてわれわれが過去においてどう問題を捉え、それにもとづきどのように創造しようとして実践し、それがいかなる成果、あるいは陥穽を生みだしたのかを歴史生成的に把握する。

・八九年事態以降

・スターリン主義の全面的破産の露呈＝われわれ的には７・２０事態後の大衆運動主義、動員機能主義的傾向に陥っていた地区などの困迷が現象化した。

・克服の提起として全体主義的発想と物象化型思考の批判、下部主義的発想の克服などを問題とした（箱問題）しかしそれが個人の自立と組織の形式的民主的運営論＝スタ克となる傾向をも生みだした。

・また他方で個人を起点として、論争し、批判し、実践する主体の発展という捉え方を孕ませた。その結果指導の内容が個的自立の促進に一面化する傾向も生まれた。『スターリン主義的組織観の克服』をその内容性においてアトミズム的に捉えていく根拠がある。

・そこで個人主義的自立を価値観化することで共同性や同志的連帯が考えられなくなっていることを問題にし、その克服において共同体的主体としての団結を再構築していくことを課題としている。

・個人的傾向で陥っていること

・「自分が分からない、出来ないこと」を個人主義的に捉え個人主義的に捉え、個的な能力性の問題として

考えるということが生みだされてきた。「教える、学ぶ」という構造が欠落し、全てを自分で考える形式民主主義でスターリン主義を越えるというようになってしまった。そこから個人をおいこむということも生みだされたと捉えるべき。

・理解できている、できていないということを個人のアトミズム的対抗で押さえてはならない。われわれは「自分は理解できるけど、他者には理解できない」といった関係性を止揚することそのものをめざし、いかにしたら共に理解しあっていける関係を作っていけるのかを問題にしようとしているのである。

・この間のアトミズム批判のなかでまたしても「自分には共同性がない」として、それを個的な問題としてとらえて悪循環におちいっている場合もある（アトミズム的自己拘泥、ブルジョア的自然発生性）あるいは共同体的自然の中に内存在することに満足しないで、何か別のものを個的、対抗的に措定し結局「分からない」というようになっている。組織がとらえかえしてきたその思考の回路のなかにはいっていくことが重要。ブルジョア的自然発生性におちいっているとそうした思考回路のなかにはいることを拒絶し「考えない、分からない」ということを繰り返すことになる。（プチブルは別様の内容をあてようとする）

オルタ潮流について

われわれがめざす革命はあくまでもソヴィエト革命であるが、自ら（自らの勢力）が唯一の前衛（党）であり、自らが中核となって革命が成就される訳ではないということがまず前提である。自分たちのみが普遍的真理の体現者であるとするのはスターリニストの発想であり、われわれの主張もソヴィエト勢力内部での論争を媒介

にして共同主観化されていくという意味において相対的な「真理」でしかない。

つまり革共同的に自らの同心円的発展のうちにソヴィエトを展望していくのではなく、広範な潮流の形成を通じ、そこでの論争と共同行動＝政治経験の積み重ねのうちにソヴィエト建設を展望していくことが可能になるということであり、図式化してみればオルタ潮流とは日本帝国主義の上部構造の変革を広範な人民との結合で実現するというあくまでもわれわれの戦略的総路線からみれば最少限綱領としてあるということである。（その場合最大限綱領は日本帝国主義の下部構造的変革でしかありえない）

その意味でわれわれはマルクス主義綱領派以外の勢力―ブルジョア民主主義革命をめざす部分とも結合していかなければならないし、合法的な政治闘争機関をも駆使して潮流を形成していくのでなければならない。

マルクスラジカル派の総括

1）何から入るか―現在をどう見るかの評価（動員の伸び、メンバーの数）

←

何と比較するか（過去との関係で）

2）過去に対象化された共同主観性で現在を措定したのだからそこでの実践―政策を捉え返していく。

→政策上の誤りとその変革→未来の措定